記録

内町と船頭町の昔をしのぶ会

時日 十月二十四日午後　主催 佐伯史談会
会場 三の丸佐伯文化会館

集った人々は（カッコ内は出身地域、敬称省略）今井壽男（船頭町）井上雅次郎（内町米水津村出身）石田豊（西谷、西上浦出身）梁矢源吉（船頭町）今泉壽（芳島）広末隼美（方島）平田幸市（内町、切畑出身）土屋藤治（船頭町）池田円作（蛇崎）安藤ラク（船頭町）橋佐古寛四郎（本町）山田かよ（内町）山後清一（船頭町）大地ユキ（船頭町）西野英司（船頭町）浅利重太郎（船頭町）高司トヨ、浅利千栄（共に船頭町）羽柴弘、山内武麟、佐脇貫一、市野義仁、梁矢嘉蔵、五十川千代見（以上史談会）の各氏。いずれも内町出身者または縁故者で、（佐伯町）を語るにふさわしい人達であった。

会場には土屋藤治氏が、明治、大正期の四季の佐伯町を描いた屏風を出陳、養賢寺の馬場、番匠川池船夜景、白魚とりなど、工藤幸夫氏等の絵は、見る人々を懐旧の情にひたらせた。

話はまず内町川の思い出からはじまり、山内、橋佐古両氏が、内町川に着いた上浦、大入島のおろし船、月本回漕店の上荷船を語り、ドブ川だったが、満潮時は水が豊富で水泳ができたと方島河岸を語れば、広末、今泉両氏がこれに和し、方島生れの思い出話をする。

内町川に架かった万年橋、諸水橋、大平橋。角田橋といわれた朝日橋、川端にあった榎木。話は川の流れをさかのぼって船頭町川、旧番匠川となり、今井氏が池船橋畔にあった灯明台（石灯籠）にお灯明をあげた話をする。塩飽屋、米屋、加島屋など船頭町の旧家と、今泉元町の三義井をはじめ、下住吉、広小路、下古市町の井戸の話。お作事浜、西浜、札場の思い出など、このほど架橋されたお作事橋に中江川と書かれてあることから、旧番匠川が是か、中江川が是か、それとも船頭町川かなど論議が沸騰した。

ついで佐伯駅と日豊線開通、国道二百十七号線となった、佐伯市街から常盤橋を経て佐伯駅にいたる道路の今昔、安藤ラクさんが人力車で葛港へ、艀（はしけ）から汽船に乗り大分に向かった話をする。

番匠川を上下する木炭船や上荷物、船頭町川岸についた中浦の船、久部河岸（池船）についた下浦の船や上方行きの機帆船。雑穀、砂糖、石油など上方から輸入する商品はほとんどが機帆船でもたらされ、池船河岸に陸揚げされていた。

住吉浜のおんばらい、内町の神明祭、船頭町の住吉祭、五所明神祭の神輿行事など、話の夕べはつきなかった。

午後四時半閉会、一同後日の再会を約し、玄関前で記念写真など撮って散会した。

（佐賀記）

龍岩寺奥の院礼堂を訪ねて

かねて念願の、宇佐郡院内町の龍岩寺を訪ねる機会を得た。安心院町である（また文化財指導者懇話会というのに出席してのことである。）

山里はいたるところ柿紅葉、黄熟の稲はまだ半ば残っていて、院内の谷は深々と秋の装い。バスで迂志龍岩寺（ウシロ）は谷もせばまり、路傍の藪には山いものつるが黄色く立ちのぼっている。

寺の脇から小路をメぼり、うすぐらい樹立ちを抜けると、パッと高くに仰がれる奥の院礼堂、写真では見かけていたがやはりすばらしい。

崖とはいのぼり礼堂にはいると、正面に阿弥陀如来、右に薬師如来、左に不動明王、脇の一木彫りと伝えられる。端正、豊満、ボリューム満ちて、慈眼しずかに衆生を視てござる。脇の素木が美しい。解説に岩屋先生という人を得て、深い感銘にうたれる。

ああ、やはり来てよかったなあと思いつつ落葉を踏んで下った。（H）